

馬原アカリ医学研究所

～小さなダニと向き合う研究所の大きな役割を紹介～

2人の出会いは“アカリ”がもたらしました。

“アカリ”とは学名(ラテン語)で“ダニ”のこと。

昨年7月、阿南市新野町に、日本紅斑熱をはじめとするダニ媒介性疾患の検査や診療支援、研究を進める日本で唯一のダニ専門の研究施設が開設されました。

併設された資料館は一般開放され、教育支援や生涯学習の場としても有効活用されています。人と人、人と自然、そして命をつなぐ「アカリワールド」へようこそ。



馬原アカリ医学研究所 所長 藤田博己さん

馬原医院 院長 馬原文彦さん

プロフィール

馬原 文彦さん (1941年生・熊本県出身)

札幌医科大学大学院修了後、杏林大学医学部講師。1980年3月に馬原医院開業。阿南市医師会理事、徳島県医師会感染症対策委員長。2007年から東海大学医学部非常勤教授。医学博士。日本医師会最高優功賞、第63回保健文化賞など受賞。

藤田 博己さん (1953年生・青森県出身)

弘前大学農学部卒業後、大原総合病院附属大原研究所に勤務。在職のまま、神戸大学大学院医学研究科の微生物学講座を経て、医学博士。2011年から藤田保健衛生大学医学部客員教授。2012年5月より馬原アカリ医学研究所所長。

阿南市で発見された日本紅斑熱

日本紅斑熱は、馬原医院院長の馬原文彦さん(71歳・新野町)が1984年に発見した、マダニ類により媒介される急性熱性感染症と呼ばれる疾患です。それまで国内では類例がなかった疾患は阿南市で発見され、日本のみならず国際学会でも大きく取り上げられました。「患者に学ぶ」。恩師の教えどおりに臨床症状の記録を取り続け、重ねた研究成果は、その後の疾患概念や治療法の指標となりました。

馬原さんが新野町に有床診療所を開設したのは1980年3月。「赤ひげ」のように地域に密着した医者になりたい」という初志が、それまで心臓外科医として第一線で活躍していた馬原さんの足を、無医地区だった新野町へと向かわせました。

新しい疾患の発見に至る患者が診療所を訪ねてきたのは、その4年後のこ

と。「山でダニに刺されてから高熱と発疹が出た」と、同じ症状を訴える患者が立て続けに現れたのです。初めて診る農村地域特有の症状に、馬原さんは細心の注意を払いながら診察。阿南医師会中央病院に検査データを持ち込み、意見交換を行いました。当初、県内では報告例がなかった「つつが虫病」と推測されましたが、特定には至りませんでした。検査結果を分析するなかで、OX2抗体値が高いことや、その正常値が定められていなかったことに着目した馬原さんは、多くの専門機関との共同研究により詳細な血清学的検査を進めた結果、それまで日本では存在しないとされてきた「紅斑熱群リケッチア症」であることを突き止めたのです。

発生数は増加傾向 症状を知り早期治療を

日本紅斑熱が発見された当時の発生数は10例程度でしたが、感染症法により届出義務が生じた1999年以降は増加傾向にあり、2011年には過去最高の178例が報告されています。発生地域も沖縄県から青森県までと広く、日本中どこでも発症し得る身近な疾患であることもわかってきました。

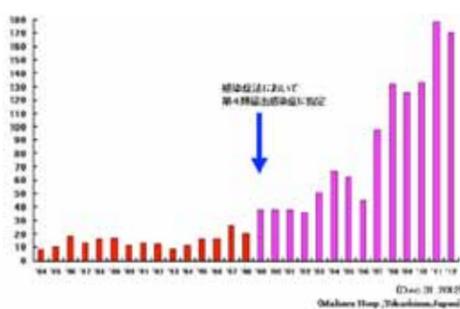
日本紅斑熱は、病原体である「リケッチア・ヤポニカ」などを保有したダニ類に刺咬されることで発症します。2〜10日の潜伏期間を有し、39度を超える高熱や倦怠感に加え、かゆみや痛みを伴わない発疹が全身に出るのが特徴。早期に適切な治療を受けないと重症化する恐れのある注意すべき疾患です。春先から晩秋にかけて発生するといわれ、野山で感染する例が多く報告されています。これからの季節は注意が必要です。

とはいえ、ダニは小さく、蚊と同じように部分麻酔をかけてから吸血するため、刺されても気づきにくいのが難点。また、麻疹や風疹、つつが虫病の症状と似ているため、勘違いする人も少なくありません。高熱や発疹が出た場合は、ダニの刺し口がないかを確認し、早めに医師に相談することが大切です。

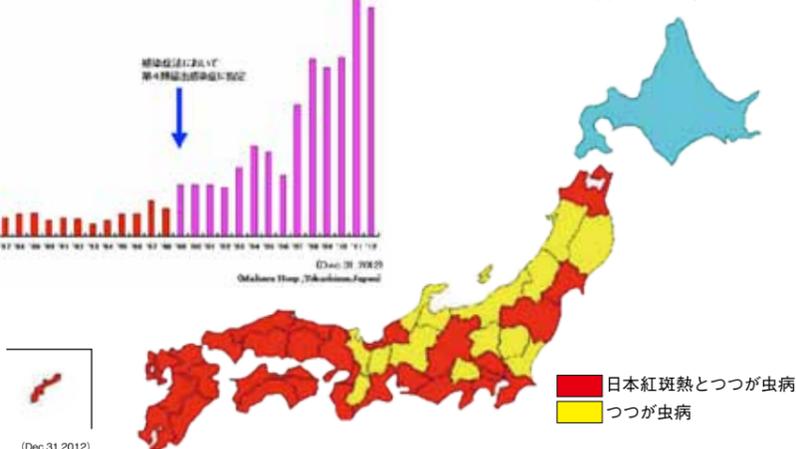
日本紅斑熱

- 1980年3月 診療所を開設
- 84年5月 発疹と高熱を訴える患者が来院
- 9月 最初の症例が阿南市医師会会報に掲載
- 新しいリケッチア症と判明
- 87年 日本紅斑熱と命名(日本感染症学会)
- 92年 WHO国際リケッチア学会で発表
- 99年 感染症法で第4類届出感染症に指定
- 2012年4月 推奨治療薬の保険診療が承認される

日本紅斑熱の年別発生数 (1984-2012)



日本紅斑熱とつつが虫の発生地分布



日本紅斑熱の典型的な発疹

ダニによる刺し口



日本紅斑熱

つつが虫病

(Dec.31.2012)

ダニ研究の灯を消さない

新しい疾患の発見は、日本で唯一のダニの民間研究施設、大原総合病院附属大原研究所（福島市）の主任研究員だった藤田博己さん（59歳）の耳にも届きました。病原体「リケッチア・ヤポニカ」を持つマダニを採取しようと、藤田さんが新野町を訪れたことがきっかけで2人は出会いました。以来、30年近くにわたり共同研究を重ねてきました。昨年4月、大原研究所が88年の歴史に幕を閉じることに。長年、培われた知識や経験が失われてしま



研究員の藤田信子さん

う、と危機感を抱いた馬原さんは、診療所の近くに「馬原アカリ医学研究所」を開設。併設して「馬原ダニの資料館」をオープンさせました。所長に藤田さんを招き入れ、日本紅斑熱が発見された新野の地で、二人三脚による新たな研究活動をスタートさせたのです。

各地から届く検体

尊い命を救う医療支援

JR新野駅から歩いて約3分のところに施設は立地しています。モダンなたたずまいの館内には、世界中から集めた100種類近くの標本をはじめ、ダニの生態や媒介する感染症の症状の写真やパネルなどが展示されています。中央部にはダニの生態を調べる研究スペースがあり、ほかにもダニ媒介性疾患の検査や診療支援を行う実験室なども完備されています。

明るい雰囲気資料館とは一線を画す実験室では、ダニ媒介性疾患の確定診断が行われています。「通常、血液

検査は都道府県に設置された衛生研究所などが受け持ちますが、日本紅斑熱や、つつが虫病の検査を行っていないところもあり、疑いのある検体が各地から送られてきます。」と藤田さん。治療が遅れると重症化する恐れがある疾患だけに、その確定診断は一刻を争うといえます。豊富な経験と知識を生かし、より早く、より正確な検査方法の改良・開発が日々進められています。

また、日本紅斑熱の治療法は、馬原さんの長年にわたる臨床治療や基礎的研究により確立され、多くの医療現場で応用されています。医療関係者を対象にした臨床講義や、実際に患者を受け入れた病院からの診療相談に応じるなど、医療支援の普及啓発にも貢献しています。現在は、国立感染症研究所と連携した研究を進めるなど、地域医療を超えた取組を展開。感染症から尊い命を救う「馬原アカリ医学研究所」の果たす役割は大きいといえます。

資料館を開放

教育支援にも一役買う

研究所に併設された資料館は一般開放され、誰でも無料で見学することができます。開設半年で来場者数は200人を超え、最近では小中学生の授業の場としても利用されています。1月25日には、新野中学校3年生による理科学習が行われました。



自然が豊かであることを伝えたくて

「ダニ」と聞けば悪いイメージを持ちがちですが、人に害を及ぼすものはほんのわずかで、ほとんどのダニは自然界の中で欠かせない働きをしています。たくさんダニが生息しているということは、それだけ自然が豊かだということ。それを子どもたちに知ってもらいたくて」

ほほ笑ましく子どもたちと接する馬原さんに、思いがけないプレゼントが届きました。以前に資料館を訪れた新野東小学校5・6年生の児童から、学習発表会で披露した劇を収録したDVDが送られてきたのです。舞台では、馬原さんの「人生の歩み」がコミカルに描かれていました。それを見た馬原さんは、とても感動されたそうです。人と人、人と自然、そして命をつなぐ「馬原アカリ医学研究所」に、皆さんも訪れてみてはいかがでしょう。

※資料提供 馬原アカリ医学研究所



資料館の魅力語る篠原課長



馬原アカリ医学研究所
 阿南市新野町是国 56 番地3
 ☎・FAX 0884-36-3601
 開館 9:00~18:00
 休館日 土・日・祝日

テーマは「食物連鎖」。自然界におけるダニの働きや人とのかわりから、自然の営みや豊かさについて考えました。馬原さんの講義や資料館での観察を通して日本紅斑熱やダニの生態について理解を深めた生徒の皆さん。藤田さんのユーモアあふれるトークに関心をかき立てられ、次から次へと質問が飛び交いました。

「北海道にはダニはいないのですか」「新野の山で寝っ転がると、その下には何匹くらいのダニがいますか」「ダニに血を吸われていたらどうすればいい

い」「害になるダニとそうでないダニの割合は」「ダニを有効活用している事例は」「ダニは食べられますか」「私の体にダニはいますか」

あつという間に1時間が過ぎ、アカリワールドを堪能した生徒の皆さんからは、こんな感想が聞かれました。

「ダニに対するイメージが変わりました」（宮本詩歩さん）「私たちの身近には何万ものダニが存在していることなど、大変興味深い話が聞きました」（尾山純菜さん）「ダニの標本がたくさんあったので、少し慣れた感じがしました」（畠山敬絵さん）「新野町の自然の豊かさを再認識しました」（新居伸一朗さん）

市教育委員会も推奨！

阿南市の小中学生だからこそ、できる学習がある

市の教育委員会も「馬原アカリ医学研究所」の利用を推奨しています。幾度となく資料館を訪れている学校教育課課長の篠原 真さんは、その魅力がこう語ります。

「阿南市に日本で唯一のダニ専門の研究所ができました。阿南市の小中学生だからこそ、できる学習があると思います。馬原アカリ医学研究所の施設見学を授業の一環として取り入れることも可能でしょう。中学校の理科では自然界の食物連鎖でダニを取り上げ、

消費者・分解者としてのダニの存在を学習するのもいいでしょう。また、夏休みの自由研究で、一見トトロを思わせる、見る人によってはかわいいとも思えるササラダニを研究する手もあります。最近は虫の苦手な小学生が増えている、とも聞きますが、試しに、家族で研究所を訪問して顕微鏡の中をのぞかせてもらうのも貴重な経験になります。ほかの県では体験できない貴重な施設が阿南市にあるということをもっと知って、そして、「アカリ」というすてきな学名を持つ生物と出合いを持ってほしいと思います」